

道徳的行為に関する体験的な学習等を取り入れる工夫

愛知淑徳大学非常勤講師 柴田 八重子

1 学習指導要領では……

〔「第3章 特別の教科 道徳」の「第3 指導計画の作成と内容の取扱い」の2〕

(5) 児童(生徒)の発達の段階や特性等を考慮し、指導のねらいに即して、問題解決的な学習、道徳的行為に関する体験的な学習等を適切に取り入れるなど、指導方法を工夫すること。その際、それらの活動を通じて学んだ内容の意義などについて考えることができるようにすること。また、特別活動等における多様な実践活動や体験活動も道徳科の授業に生かすようにすること。

道徳科においては、道徳的価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を(より広い視野から)多面的・多角的に考え、自己(人間として)の生き方についての考えを学習を行う。こうした道徳科の特質を生かすことに効果があると判断した場合には、多様な方法を活用して授業を構想することが大切である。道徳科の特質を生かした授業を行う上で、各教科等と同様に問題解決的な学習や体験的な学習等を有効に活用することが重要である。(その際、中学校では生徒の発達段階や特性等を考慮した上で、人間としての生き方について多面的・多角的に考え、話し合いや討論することを通して、主体的かつ自発的な学習を展開できるように創意工夫することが求められる。)

(1) 道徳科における問題解決的な学習の工夫

(2) 道徳的行為に関する体験的な学習等を取り入れる工夫

※小： 道徳的諸価値を理解したり、自分との関わりで多面的・多角的に考えたりするためには、例えば、実際に挨拶や丁寧な言葉遣いなど具体的な道徳的行為を通して、礼儀のよさや作法の難しさなどを考えたり、相手に思いやりの言葉を掛けたり、手助けをして親切についての考えを深めたりするような道徳的行為に関する体験的な学習を取り入れることが考えられる。さらに、読み物教材等を活用した場合には、その教材に登場する人物等の言動を即興的に演技して考える**役割演技など類似体験的な表現活動**を取り入れた学習も考えられる。

これらの方法を活用する場合は、単に体験的な行為や活動そのものを目的として行うのではなく、授業の中に適切に取り入れ、体験的行為や活動を通じて学んだ内容から、道徳的価値の意義などについて考えを深めるようにすることが重要である。

※中： 道徳的諸価値を理解するためには、例えば、具体的な道徳的行為の場面を想起させ追体験させて、実際に行うことの難しさとその理由を考えさせ、弱さを克服するこ

との大切さを自覚させたりすることが考えられる。また、道徳的行為の難しさについて語り合ったり、それとは逆に、生徒達が見聞きした素晴らしい道徳的行為を出し合ったりして、考えを深めることも考えられる。さらに、読み物教材等を活用した場合には、その教材に登場する人物等の言動を即興的に演技して考える役割演技など類似体験的な表現活動を取り入れた学習も考えられる。

これらの方法を活用する場合は、単に体験的な行為や活動そのものを目的として行うのではなく、授業の中に適切に取り入れ、**体験的行為や活動を通じて学んだ内容から、道徳的価値の意義などについて考えを深める**ようにすることが重要である。ただし、道徳科の授業に体験的な学習を取り入れる際には、単に活動を行って終わるのではなく、生徒が体験を通じて学んだことを振り返り、その意義について考えることが大切である。体験的な学習を通して道徳的な価値の理解を深め、様々な課題や問題を主体的に解決するための資質・能力ように十分に留意する必要がある。

(3) 特別活動等の多様な実践活動等を生かす工夫

道徳科において実践活動や体験活動を生かす方法は多様に考えられ、各学校で児童(生徒)の発達の段階等を考慮して年間指導計画に位置づけ、実施できるようにすることが大切である。例えば、ある体験活動の中で考えたことや感じたことを道徳科の話し合いに生かすことで、児童(生徒)の関心を高め、道徳的实践を主体的に行う意欲と態度を育む方法などが考えられる。特に特別活動において、道徳的価値を意図した実践活動や体験活動が計画的に行われている場合は、そこでの児童(生徒)の体験を基に、道徳科において考えを深めることが有効である。(※中:例えば、体育祭や修学旅行などの学校行事において、生徒一人一人が学校や学校の一員として活動した経験をもとに、自分の役割と責任について自覚を深めた体験を道徳科の授業の導入や展開部で振り返ることができる。)

学校が計画的に実施する体験活動は、児童(生徒)が共有することができ、学級の全児童(生徒)が共通の関心などをもとに問題意識を高めて学習に取り組むことが可能になるため、それぞれの指導相互の効果を高めることができる。

2 「道徳的行為に関する体験的な学習等を取り入れる工夫」が具備すべきこと4点

- ① 道徳的価値の意義などについて考えを深めるようにするためのものであること
- ② 自己の問題として捉え、実感を深めるためのものであること
- ③ 道徳的価値との関連から、実感を深めることが目指されるためのものであること
- ④ 道徳科の目標の実現やその時間のねらい達成に資する学習であること

3 「道徳的行為に関する体験的な学習等を取り入れる工夫」の4点についての説明

(1) 道徳的価値の意義などについて考えを深めるようにするためのものであること

道徳科の時間に扱われる体験的な学習は、道徳的価値の意義などについて考えを深める(道徳上の)体験でなくてはならない。最も身近な日常的体験が扱われていても、道徳的価値が介在しなければ、道徳科の授業とは言えない。授業の中に適切に取り入れるとは、体験的行為や活動そのものを目的として行うのではなく、体験的行為や活動を通じて学んだ内容から、道徳的価値の意義などについて考えを深めるようにすることが重要である

(2) 自己の問題として捉え、実感を深めるためのものであること

扱われる体験的な学習が、自分自身と深い関わりのあることとして捉えられ、多面的・多角的に実感をもって関われるものでなければならない。

形は、読み物資料の登場人物の行為や体験であったり、教師から特別活動として用意された体験であってもよい。その体験が自分自身の体験だと捉えられ感じ取り、考えられることが大切である。扱われる体験的活動が、一人一人の児童・生徒にとって同じ内容の学習活動になっているとは限らない。その体験が終始他人事として取り上げられ、体験活動をしていても、自分自身の体験だという意識が全くないということであれば、道徳科で体験的な学習として扱うことはできない。

(3) 道徳的価値との関連から、実感を深めることが目指されるためのものであること

道徳科での学びは、道徳上の体験として、道徳的価値の側面から実感される学習とならなければならない。

道徳科で取り扱われる体験は、「日常の体験であってはいけない」ということではない。とっかかりとしての入り口的な問題であれば、日常的な体験であっても、いっこうに構わない。そこから道徳的体験が自分の体験として捉えられ、自分自身に対する問いが生じ、道徳的な価値観の成長実感が生み出されることが重要である。

(4) 道徳科の目標の実現やその時間のねらい達成に資する学習であること

「道徳的行為に関する体験的な学習」は、あくまでも方法であって、そのこと自体が目的化してはならない。「道徳科の目標の実現」や「その時間のねらいの達成」に効果があるとあると考えられるなら、そこで初めて「道徳的行為に関する体験的な学習」として活用・計画すればよい。

「道徳的行為に関する体験的な学習」や「問題解決的な学習」などの指導方法を工夫することが示されている趣旨を正しく理解するとともに、その説明の前後に、「指導のねらいに即して」「適切に取り入れる」という文言が附されていることの意図も汲み取り、よりよい学習計画を立てたい。

4 その他…

役割演技考：役割演技の活用として

■■ 役割演技の良いところ ■■

● 「**実感**」を持って理解することができる

知識としては「知っている」が、実際は「分かっていない」ということが、道徳授業で多すぎる。この時点で、**実感を伴った理解**を進めるために、とても有効である。

しかし、全てのことを「実感」理解できる訳ではない。一時間は45分・50分と決まっている。関係を演じる時間だけでなく、その後の話し合いの時間も十分とりたい。演じる内容・箇所は、中心的発問に関わる、一番みんなで深めたい「自己の『問い』に関わる内容」にしたい。

● 「**みんなで創る(相互関係の)学びの空間感**」ができる

全ての児童・生徒の立ち位置を、**知識者**としてでなく、**関与者**として、とれるようになる。

道徳的「問い」を持ち始めた1人の児童・生徒の「助力」としての29人は、相互にまた新たな**「問い」**を持ち始めた1人にもなり得ることかできる。相互にねらいとする価値を深めている1人として、**学びの空間感**を感じながら、更新した新たな価値観を感じながら、みんなのお陰を感じる**成長実感**を持つことができる。

◎ 時として、**資料を超える「価値観の高まり」**が起きる

創造の学びの中、時として**資料を超える「価値観の高まり」**が起きることもある。教師は柔軟な対応をしたい。